

『本当に頭のいい子を育てる 世界標準の勉強法』

(茂木 健一郎、海竜社、2001.10.)

情報が即座に手に入り、AIが多くの仕事を代替する時代には「頭の良さ」の規準が大きく変わる、と著者は述べます。有名な脳科学者が勧める勉強法です。参考になると思った箇所を紹介します。

◆世間から見れば価値がない、意味がないことのように見えても、自分で工夫し、探求し、価値基準を決めてそれに没入できる人は、それだけで何かを成し遂げる素質がある

◆「ようこそ先輩」のように「憧れを具体的な形で見えるようにする」のは、子どもの興味や好奇心、探求心を育むための「餌まき」のひとつ

◆親子の会話量は「親一：子ども二」だと思っている。なぜかという、親の方が圧倒的に経験や語彙力が豊富なので、放っておくと親ばかりが「どうなの？どうなの？」と子どもに詰め寄って、子どもが話す機会を逃してしまうから。

◆親が子どもにできることは限られている。それは「見守ること」と「応援すること」。子どもが何かに興味を持ったら、口出ししたい気持ちをぐっと我慢して見守り、応援するだけ。(略) 失敗したとしても、子どもは「自分で決めたことだから」と、なんとか自力で道を切り開いていくもの。

◆今は、自分の興味を極めれば輝ける時代。